

場の字とすといへり。按ずるに、元祿六年の士帳に、高儀町二尊佛近所など載せたり。

○善照坊圓乘傳

三州志健獲餘考に云ふ。天正八年庚辰閏三月、柴田修理勝家・柴田三左衛門勝政・佐久間玄蕃盛政・徳山五兵衛則秀・拜郷五左衛門家嘉等、萬五千の銳甲をして加州へ出勢、盛政先鋒たり。勝家は御幸塚に在陣し、玄蕃三左衛門をして山海の二道より分撃せしむ。依りて玄蕃は、吉野・劍・鞍嶽・四十萬・若松より傳燈寺へ至り、民舎・僧院に火を縱つ。三左衛門は安宅より本吉を経て、宮腰に抵る。玄蕃また軍を進め、木越光徳寺の要害を攻め破り、御山に赴かんと、柴田三左衛門と二將の利兵挾攻すれば、光徳寺降を乞うて、能登へ退去す。然れども御山の援あらん事を憚り、中條・今町に銃士を留め置き、御山城を攻めんと諸將と胥議し、三左衛門は宮腰より廣岡に至りて陣し、五兵衛・五左衛門は犀川を隔て、陣し、玄蕃は南良瀬の山路より小立野に抵りて御山城を攻む。守將松永丹波を初め、鈴木出羽其の子右京次郎左衛門・采女太郎暨び黒瀬左京・平野甚右衛門等、防

擊奮闘すれども守るに堪へず、悉く戦死す。依りて本源寺・廣濟寺・惠林坊・善照坊等、城を玄蕃に與へて去る。自註に云ふ。善照坊は今金澤公儀町善照坊の祖なり。といへり。今按ずるに、善照坊圓乘は、尾山本源寺・武佐廣濟寺など、共に、そのかみ金澤城内に取籠り、木越光徳寺・鳥越弘願寺など、共に武威を振ひ、當國をば押領して、本願寺の指揮に隨ひ、賊魁の一人なりしかど、佐久間盛政の武力に依りて城地を引渡し、石川郡吉藤村へ退去し、前田家の藩政に隨從して、子孫于今連綿せしもの也。

○村井下家中跡

此の地は、舊藩中は執政村井豊後守の下邸の一ヶ所にて、長町の下屋敷を上家中と稱し、此の地をば下家中と呼びて、小身の家士此の地に居住せり。明治廢藩後下屋敷の名稱を廢し、下公儀町と町名を定めたり。

○名産柑子

此の下屋敷の地は、土地に應じけるにや、柑子を植うるに他所の産より甚だよとして、今も多く植えて培養せり。舊藩中は此の地に、村井家士徴祿の人々のみ居住して、柑子を

培養し、内職に笠當を製す。故に童幼の謔にも、長の林檎に村井の柑子、長の本結に村井の笠當と、對句にいへり。按ずるに、柑子は水鏡に、聖武天皇神龜二年と申すに、もろこしより柑子の種をもて來り、是より始めて此國に出きそめし也。と見ゆ、續日本紀に、神龜二年十一月。中務少丞從六位上佐味朝臣虫麿・典鑄正六位上播磨直兄弟。並授從五位下。兄弟初養柑子從唐國來。虫麿先殖其種結子。故有。此授焉。と載せらる。是よりさき、橘はありしかど、柑子は此の御代より初りしなり。

○神谷町

國專昌披問答に載せたる金澤市中町名附に、公儀町の次に油車町・神谷町とあり。此の町は、今公儀町の裏町なる谷町にて、後人神谷町を略稱して谷町と呼べりと云ふ。龜尾記に云ふ。谷町は舊名を神谷町といへり。昔國老の神谷信濃守の邸地なりし故に、神谷町と呼べりと。今按ずるに、元祿六年の士帳に、本保十郎兵衛の邸地を信濃町加藤玄益隣とあり。信濃町と神谷町と若しくは同地ならんか。神谷信濃守といひしゆゑに、神谷町とも信濃町とも呼びたるに

や。

○神谷信濃守傳

信濃守守孝が父神谷太郎左衛門は、龜田大隅の男也。守孝は初め左近と稱し、利家卿の小姓立にて、追々に取立てられ、采地九千石賜はり、文祿四年三月奥村助右衛門家福と共に叙爵し、從五位下信濃守に叙任す。寛永五年永井信濃守尙政關東老中の列に加へられしにより、守孝は丹波守と成り、翌六年六月三日卒せり。男子なく、横山山城守長知の三男式部長治をば婿養子となし、神谷氏を繼がしむといへども、利常卿の命に依りて本姓に復し、此の後家系轉々して秩祿減少し、血統終に絶えたりけり。龜尾記に云ふ。野田山入口大佛前の川に添ひ一町ばかりにして、右へ半町ばかりの所に一堆の塚あり。碑面に從五位朝散大夫神谷信濃守と彫刻して、國老神谷氏の墳墓なりしかど、他の塚の爲に墓地を削られ、今は地域も些少にて、墳墓ばかり荒れ果てたり。と歎息せしよし記載す。按ずるに、神谷信濃守は利家卿の兒小姓より取立て給ひたりしゆゑ、利家卿の在世には殊に親しく召仕はれけん。村井長明の陳善錄に、金澤御